

彩の国 連携力育成プロジェクト ニュースレター

第 1 号

2013年3月22日発行



【発行】埼玉県立大学／埼玉医科大学／城西大学／日本工業大学

【お問い合わせ先】埼玉県立大学事務局・企画担当 ☎ 048-973-4715 / ✉ kikaku@spu.ac.jp

埼玉県内4大学による 「連携力の高い専門職育成」 がスタート!

急速に少子高齢化が進む埼玉県において、地域住民の質の高い暮らしをどう実現していけばよいのか。

将来的には日本全国でも直面するであろう

この課題に対して、埼玉県内の4大学が連携して取り組むプロジェクト“saipe (Saitama Interprofessional Education)”が始まりました。

プロジェクトの正式名称は『彩の国大学連携による住民の暮らしを支える連携力の高い専門職育成』。連携に参加するのは、埼玉県立大学、埼玉医科大学、城西大学、日本工業大学

の4大学です。

4大学の代表校である埼玉県立大学が開学以来構築してきた専門職連携教育 (IPE: Interprofessional Education) を、埼玉医科大学、城西大学、日本工業大学と共に『彩の国大学連携科目』に応用発展させることで、多職種の連携による課題発見・解決力 (連携力) の高い人材育成を行うことを目指します。

背景

少子高齢化、孤立死などの社会問題の顕在化、在宅医療・介護の推進。
(埼玉県は、2005年～2025年の高齢者人口増加率および2005年～2030年の高齢者単独世帯増加率が全国一)

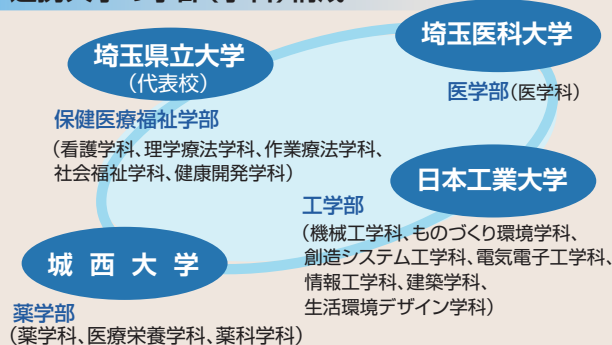
事業の基本理念

4大学共同で育成する人材を通じ、地域住民の質の高い暮らしを実現。

育成する人材像

他分野と連携し、課題発見、解決方法を考えることができる人材。

連携大学の学部(学科)構成



地域住民の質の高い暮らしの実現



本プロジェクトの事業内容

連携科目の共同開発・共同開講

埼玉県立大学が実施している専門職連携教育 (IPE) に、埼玉医科大学や城西大学、日本工業大学の学生が参加するなど、連携科目の共同開発・共同開講を実施します。

学生による共同学習の支援

自主的に地域の課題を発見し、共に解決しようとする各大学の学生による共同学習を4大学が支援します。

教育や地域に還元する学際的共同研究の実施

1大学ではなし得ない教育や地域に還元できる研究を実施します。

地域の専門職や他大学など社会への還元

教育研究の成果を生かし、地域の専門職の連携力向上に関する研修会の開催などを実施し、地域に還元します。また、保健医療福祉系の大学と工業系の大学という先進的な連携事例を他大学等へ広報します。

このプロジェクトに期待します



埼玉県知事 上田清司

埼玉県では、在宅医療・介護などのニーズに対応するため、今回の大学間連携共同教育推進事業に大きな期待を寄せています。地域住民の暮らしの課題を的確に発見・解決できる力を身につけ、将来様々な形で県民の暮らしを支えてくれる優秀な人材が各大学から多数輩出されることを望んでいます。

第1回 彩の国大学連携学長会議を開催

2012年11月7日、埼玉県立大学にて第1回 彩の国大学連携学長会議を開催し、事業全体の進め方や連携科目の試行について合意しました。会議で話された各学長の意気込みをご紹介します。

埼玉県立大学 三浦 宜彦 学長

大学の枠を超えて学生がチームを組み、現場で実習を行うことによって、コミュニケーション能力など社会で必要とされるソーシャルスキルが身に付く。医療の高度化等に伴う患者ニーズの多様化や在宅医療・在宅介護の国レベルでの推進を踏まえると、高齢者等が地域でいかに質の高い暮らしを送ることができるかが重要。中でも全国一のスピードで高齢化が進む埼玉県に、高齢者等を支えることができる質の高い人材を輩出していきたい。

埼玉医科大学 別所 正美 学長

埼玉医科大学では、優れた臨床医の育成を理念とし、「社会的視点に立った調和と協力」

を実践できる医療人の育成を目指している。より具体的には、様々な職種の人と協力して統合力を磨くということだが、本プロジェクトはまさにこの部分に合致するものだと思う。また、昨今国の方針としてもチーム医療の推進や超高齢社会に対応した医療人の育成などが目指されているが、こうしたことにも寄与するプロジェクトだ。良い連携を続けていきたい。

城西大学 森本 雍憲 学長

城西大学では、「学問による人間形成」とい



4大学及び埼玉県による、大学間連携共同教育推進事業の共同実施に関する協定書を手に記念撮影。(左から)森本学長、三浦学長、埼玉県保健医療部・奥野部長、別所学長、波多野学長

う精神で人材を育成してきており、今回の連携に参加する薬学部では薬学科、薬科学科、医療栄養学科の3学科で薬剤師や栄養士などの医療人を養成してきた。高齢化社会において、多くの人が健やかな人生を送るためには、単一の職種だけでは支えきれず、多くの人が連携する必要がある。今回のプロジェクトはその意味でも非常に重要と考えており、本学が持つパワーを最大限に発揮していきたい。

日本工業大学 波多野 純 学長

日本工業大学では最近、実学と工学をセットにした造語である「実工学」という言葉を使っ

ている。工学系は理論だけではなく、ものをつくり、それを動かせるようにならないといけない。本学では2009年に生活環境デザイン学科を新設したが、実践のためのフィールドを持っていないという欠点があったため、今回この取組に参加できることは非常にありがたい。その他にも福祉ロボットや情報システムなど、様々な分野で協力させていただきたいと思っている。

4大学の教職員による「共同会議」を設置しました

本プロジェクトを充実したものにするため、4大学の教職員が月1回のペースで共同会議を行っています。これまでの会議では、プロジェクトの「夢」とともに、実際の運営上の課題についても本音で議論。学生の連携教育を進めるためには、まず教職員が信頼関係を結び、連携を密にしていける必要があります。昨年10月以降さまざまな議論を重ねることにより、その礎(いしずえ)を築くことができました。



キックオフ・シンポジウムを開催しました

3月14日(木)、城西大学にてキックオフ・シンポジウムを開催し、172人にお集まりいただきました。シンポジウムでは、薬学教育にてIPEを行っている千葉大学薬学部の石井郁都子先生をお招きし、学部を超えたIPE展開についてお話いただきました。その後、埼玉県立大学および埼玉医科大学のこれまでのIPEの経過報告を踏まえ、今後の本プロジェクトについて、参加者からの質疑も交えて活発に議論が行われました。



英国における先駆的なIPEの現状を学びました

3月5日～9日に、4大学の教職員が英国のIPEを学ぶ海外研修を行いました。レスター大学、コベントリー大学、キングス・カレッジなどで展開しているIPEについて、教員と意見交換をしたほか、実際のIPEの様子を見学しました。また、本プロジェクトについても「建築や生活環境に関する学生が共に学ぶプロジェクトは画期的」との評価を得ました。今後も、先駆的事例から学びつつ、本プロジェクトの成果を国内外に発信していきます。



ウェブサイト、Twitterアカウント、Facebookページを開設しました!

『彩の国連携力育成プロジェクト』を発信するため、ウェブサイト、Twitterアカウント、Facebookページを開設しました。本プロジェクトの取り組みや、IPE関連ニュースなどを中心にお伝えしていきます。ぜひご覧ください。

WEB <http://saipe.jp>

@saipe00

<http://www.facebook.com/saipe.jp>

第1回IPW実習が行われました

2012年2月、4大学の学生による専門職連携実習（IPW実習）が実施されました。今回の実習テーマは、病院や施設の患者・利用者本人や職員から話を聞き、本人の生活課題を発見し、チームで課題解決の方策を立てること。1週間前に行ったオリエンテーションを経て、4大学の学生25名は4つの病院や施設に分かれて実習を行いました。介護老人保健施設での実習当日の様子をお伝えします。



■さまざまな職種の“卵”たち

実習当日の朝。介護老人保健施設「ブルミエール」に、Aチームのメンバーは皆、緊張から集合時間よりもかなり早く姿を見せた。チームメンバーは、“看護師の卵” 小寺恵実花（埼玉県立大学3年），“ソーシャルワーカーの卵” 押谷美幸（埼玉県立大学3年），“臨床検査技師の卵” 横山公美子（埼玉県立大学2年），“医師の卵” 金田光平（埼玉医科大学3年），“管理栄養士の卵” 千田美里（城西大学3年）、そして“建築士の卵” 村上光明（日本工業大学2年）の6人。

どういった家に住んでいたのか、住まいにどのような転倒のリスクがあるのか。自宅ではどんな食事を摂り、家族構成はどうか。そして、将来どんな生活をしたいと思っているのか…。6人は3組に分かれ、利用者、施設内の担当看護師、支援相談員（ケアマネージャー）の3人から話を聞いて回った。

■職種で異なる「まなざし」と「価値観」

聞き取りを終えた後、6人は利用者の支援プランを考えるためのディスカッションに入った。

利用者本人の希望は在宅への復帰。しかも、今まで通りの自立した生活だ。「利用者の気持ちに伝えたい」と考える社会福祉学科の押谷に対し、転倒のリスクを懸念する看護学科の小



活発なディスカッションから、支援策のアイデアが湧き出てくる

寺。医学部の金田は「100%今まで通り、は無理かもしれない。でも、それにできるだけ近づけるのが医療・福祉の役割」と述べた。利用者の自宅の縁側も、独居ともなれば落下のリスクを伴う。リスクを軽減するには、スロープをつけるか、無理であれば一部改築して縁側をなくす方法もある。しかし、押谷は「危険だから、という理由だけでなくすのは…」と抵抗した。村上も、建築の立場から「高齢者にとって縁側は“段差”ではなく、椅子のようなもの」という。真剣にディスカッションすればするほど、職種によって異なるまなざしや価値観が交差し、ぶつかりあった。

しかし、その摩擦はアイデアを生み出す力にもなった。千田はこれを振り返って「他の職種の意見に触発されて自分の意見がまとまった」と話す。

約3時間、休むことなくディスカッションは続けられた。自分で栄養管理をするための意識づ

け、薬の飲み忘れを防ぐ工夫、万一の緊急事態を周囲に知らせる工夫、火事防止のためIH調理器への交換…利用者の独居生活を安全なものにするためのアイデアは、ホワイトボードいっぱいになった。

■誰が欠けても、このプランは作れなかった

実習を終えた学生たちは、さまざまな感想を述べた。

「他の職種と価値観の違いがあっても、答えは出せるということを学んだ」（押谷）、「看護だけでは解決できない問題も多くもどかしさを感じたが、多職種がかかわればさまざまな面から支援できる」（小寺）。「栄養学を学んでいる自分にも、食事以外の情報を聞けたことがよかった」（千田）。「医師も他の職種がいるからこそ働けるのだと知った」（金田）、「チームへの参加の仕方は、職種だけでなく性格も影響すると思った」（村上）。「臨床検査技師の仕事を検査室以外に開拓できる可能性を感じた」（横山）。

最後に、ファシリテーターを務めた介護老人保健施設「ブルミエール」の理学療法士・原嶋創さんがこう締めくくって実習は終了した。

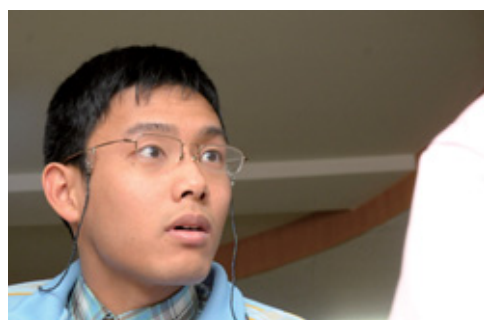
「君たちのうち、1人が欠けてもこのプランは作れなかった。多職種連携の必要性はここにある。これから社会に出ても、自分の職種だけでは限界があり、パーフェクトな仕事はできないのだということを知っていただきたい」

●実習施設と参加学生の所属学科（大学名省略）

介護老人保健施設 ブルミエール	看護学、社会福祉学、検査技術科学、医学、医療栄養学、生活環境デザイン学
毛呂病院 光の家療育センター	理学療法学、健康行動科学、検査技術科学、医学、薬学、生活環境デザイン学
かさい医院	看護学、社会福祉学、口腔保健科学、医学、薬学、生活環境デザイン学
中田病院	理学療法学、健康行動科学、口腔保健科学、医学、薬学、生活環境デザイン学

●IPW実習の主な流れと内容

情報収集	●施設見学、患者・利用者及び職員からの情報収集
ディスカッション	●情報交換及び共有 ●今後の生活のあり方について議論
リフレクション （振り返り）	●チーム形成のプロセスと個々人の役割について振り返り



施設を利用する高齢者や、担当の看護師に話を聞く学生たち

百聞は一見に如かず ― まずは「現場」の経験を

栗林福祉建築事務所
二級建築士／福祉用具専門相談員／二級福祉住環境コーディネーター
栗林 稔昌 さん

栗林福祉建築事務所では、私自身が事故で脊髄損傷を負った経験を基に、障がい者や車いすの方、身体機能が低下した方のための住宅の設計を行っています。

事故や病気で障がいを負った人は、それまでの自分とのギャップに苦しむことになります。そうした方々が在宅に戻って安心・安全に生活していくためには、医療、行政サポート、住宅、そしてピアサポートという4つの面での環境整備が必要だと私は考えています。

中でも医療・行政サポート・住宅の3つは、現実問題としてなくてはならない要素です。

ところが実際には、その3要素がタッグを組んでいない状況が存在しています。それぞれが自分の専門性にだけ閉じこもり、違う分野については「私の担当ではありません」となりがちです。

しかし本来、その3要素は切り離してはいけないものです。例えば住宅について言えば、障がいを負った人の状態によって適切な改修方法は変わってきます。一言で「車いす」といっても、ちょ



とした段差なら乗り越えられるのか、車いすからベッドに自分で移ることができるのか、そもそも障がいは安定しているのか進行しているのかなど、医療関係者に確認しなければ分からないことはたくさんあります。

また、住宅改修のために利用できる行政サポートは、制度としてはさまざま存在していますが、建築士と行政との連携が取れていなければ、無駄な費用がかかってしまうことは目に見えています。

現時点ではそれらを一括して相談できる窓口が少ないために、当事者たちは一体どこに何を相談すればよいのかが分からない状況にあります。ただでさえ予想外の出来事で頭が混乱しているのに、追い打ちをかけるように無駄な労力と時間と費用を強いられるわけです。

ですから今回、埼玉県内の4大学が連携するという話を聞いて、「そ

れは本当に必要なことだ」とすぐに思いました。医療スタッフ、リハビリスタッフ、ソーシャルワーカー、そして建築系の職種などがスムーズに連携できるようになれば、これまで障がい者とその家族が強いられてきた我慢をぐっと軽減することができます。

百聞は一見に如かずと言いますが、「現場を見る」ことは本当に大切です。学生たちにも、是非その点を経験してほしいと思います。

saipe (彩の国連携力育成プロジェクト) に寄せる期待

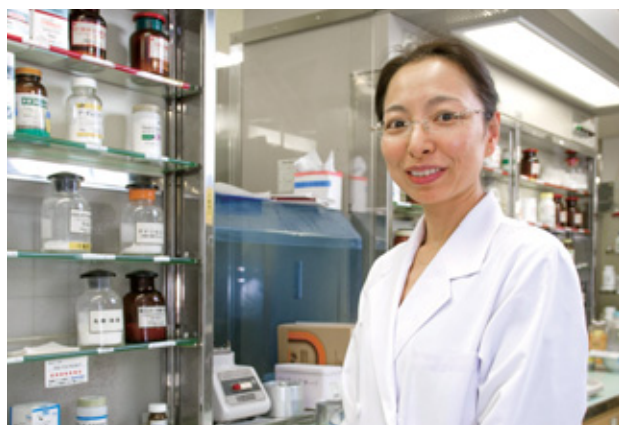
チーム医療に不可欠な「対等な関係性」を学ぶ機会に

埼玉医科大学総合医療センター 薬剤部 係長 市場 仁子 さん

埼玉医科大学総合医療センターは、内科を始めとする25の診療科からなる総合病院です。私が現在所属しているのは薬剤部の調剤室ですが、以前は病棟での薬剤管理指導業務を担当していました。病棟では、さまざまな分野でチームによる医療が行われているので、薬剤師はそこにも参加することになります。

私は2001年に糖尿病療養指導士の資格を取得したこともあり、糖尿病チームの土台作りの段階から関わっています。医師、看護師、理学療法士、栄養士、臨床検査技師、そして薬剤師と、それぞれ専門性の異なるメンバーが、糖尿病の患者さんをケアするという共通認識のもとで連携するチームです。

これからの時代は、こうした連携が大病院に限定されたものではなくなります。私もワークショップの開催などに関わっていますが、地域全体で糖尿病の患者さんを支えていきたいと思います。ですから、どのような職場で働くにしろ、これからの薬剤師には多職種連携の素養が当然のように求められることになるのではないのでしょうか。



チームがうまく機能するためには、全てのメンバーが対等な存在として関わるのが大事です。役割として「引っ張っていく」とか「フォローする」という存在はあってもいいのですが、そこに序列が発生してしまうと「この人に任せておけばいい」という雰囲気が出てきて、様々な見方を重ねるための多職種連携のはずが、単一の方向性しか見出せなくなってしまいます。「みんなが対等」というのは本当に大切なことなんです。

ですから、今回の4大学連携の取り組みは非常に良いことだと思います。学生のうちから、別々の専門性を持った人たちが集まってグループワークやディスカッションをするという経験は、将来、必ず役に立つはずです。

それから、「分からない」ことは必ずしも恥ずかしいことではない、ということも学んでほしい点です。同じ専門職同士では「分からない」はなかなか言いづらいものがありますが、お互いの専門性が違う場合の「分からない」は「知りたい」という意味とイコールです。学生たちには「思ったことや疑問に感じたことはどんどん言う」という積極性ととともに、他人の話を聞く姿勢も身に付ける、という経験を是非してほしいですね。